

○2012 年 8 月 22 日 公の精神でつながるコミュニティー「一志会」の第 11 回例会が開催され、ゲストに経営ジャーナリストの片山修氏をお迎えし、「日本企業とサムスン」 ぞだいたした講話をいただきました。

「公の精神」のもとに社会との関わりをもち責任を果たそうとの想いを共有する大企業経営者の会員制 “コミュニティー” である「一志会」の第 11 回例会を、8 月 22 日に開催しました。

ゲストにお迎えした片山修氏は、丁寧な取材と鋭い分析で数多くの企業及び経営者について長年にわたり実証研究をされており、これまで優に 50 冊を超える著書を出版され、経済や経営のメディアで幅広く活躍されている経営ジャーナリストです。一柳とは 30 年来の勉強仲間であると共に、一柳が尊敬する兄貴分的存在です。

今回は「日本企業とサムスン」と題した講話をいただきましたが、サムスンについても継続的に取材を重ねてこられて、既に『サムスンの戦略的マネジメント』や『日本企業がサムスンから学ぶべきこと』の著作を著しています。冒頭、先日のロンドンオリンピックで韓国が「金 13、銀 8、銅 7」の成績を上げたが、これは韓国が金メダル獲得の国家目標をたて、スポーツ人口の少ない競技を選び、財閥企業グループに競技種目を割り当てて支援させ、徹底的に英才教育を実施したことによるもので、スポーツの裾野を広げることよりも資質のあるものを選んで鍛え上げる、という「今の韓国」の象徴的な考え方が反映されている、との見方を示されました。そのうえで、世界で躍進するサムスンの原動力、リーダー像などについて具体的な事例を挙げて説明されましたが、例えば、広大な敷地に要塞ともいえるように建設されている R&D 拠点「サムスンデジタルシティ」の実態(開発要員 55,000 人、世界から優秀な若い人材を採用)では、莫大な費用をかけてでも常に世界の最先端技術を開発しているのは新商品の開発で世界をリードし続けなければ「日本の二の舞になる」との強い危機意識がある。

また、このような戦略は、オーナー経営の強力なリーダーシップによるトップダウンのもとで、大きなリスクをスピーディに決断していくことで展開されていることも話されました。勝者といわれるサムスンには影の部分もあるが、グローバル化が進む中で日本が学ぶべき点が多々あるのでないか、と締めくられて、会員に大きな刺激を与えました。

会員スピーチは、サーラコーポレーションの神野社長から話題提供がされました。「地域総合生活産業」として多角化し、地域に深く根ざした展開をしています、「地域とともに成長していく」という理念が、内向きになりがちにつながりやすく、いかにして組織に「突破力」を育むか、ということに心を砕いている、との話から、会員間で、組織の活性化について活発な議論が交わされました。



研究会の様子



片山氏



神野氏

会の半ばでは、初参加の大日本住友製薬の石田原取締役執行役員、ソニーの上田業務執行役員、日本ハムの川村取締役、ハウス食品の藤井取締役常務執行役員、キューピーの和田常務取締役から自己紹介が行われ、続いて昇格・異動された西日本電信電話の小椋副社長、プライス・ウォーターハウス・コーパースの椎名社長、島精機製作所の島副社長、ミライトホールディングスの得井常務取締役からも挨拶がありました。



石田原氏



上田氏



川村氏



藤井氏



和田氏

懇談タイムでは、初参加者も一緒になっていくつもの輪ができ、予定時刻を過ぎるまで賑やかに交流が続きました。会員も増えて、ますます充実した会になってきました。